Active ゾーンを形成した図書館におけるファミリー利用の特徴

地域公共図書館における開架フロアのゾーニング手法に関する研究 (4)

THE CHARACTERISTICS OF FAMILY USE AT A PUBLIC LIBRARY
WITH AN ACTIVE ZONE

Studies of the method of zoning an open shelf floor at public libraries (4)

北岡 敏郎*

Toshiro KITAOKA

The purpose of this study is to show that the method of zoning an open shelf floor with a popular library area is more reasonable and effective at public libraries. According to this method an open shelf floor is divided into two zones at public libraries. One is an “active zone” which consists of a popular library area with a children’s book area, a newspaper and magazines’ area and an AV materials’ area. The other is a “quiet zone” which consists of other adults’ book area with a reference area.

This research paper on the method of zoning an open shelf floor at public libraries shows that most children, especially infants and lower grade pupils, can leave their parents to use the children’s book area, and after getting books of their preference, they read them beside their parents, and again they leave their parents to get another book. As a result, many children and their parents stay mainly at the children’s book area, and many children and their parents can stay at the popular library area or the newspaper and magazines’ area, too, if each area is full of seats. Most parents who use books, on the other hand, use popular library books in the active zone, and approximately half of them use adults’ books in the quiet zone in a short time. Most parents who use books tend to use not only books but also magazines.

Keywords: public library, open shelf floor, zoning, popular library area, family use

地域公共図書館, 開架フロア, ゾーニング, ポピュラーライブラリーエリア, ファミリー利用

1. はじめに

地域公共図書館が開架式になって以来、開架フロアのエリア配置構成はあまり検討されておらず、近年の施設や資料の種類・数が充実する中で、特に利用面から実証されたエリアの再配置計画が求められる。

著者は、地域公共図書館の利用を調査し、近年の利用の特徴として成人の複合利用と幼児・児童のファミリー利用を捉え、前者では一般書エリアと新聞・雑誌エリアを隣接させた配置構成が、後者では児童書エリアと一般書エリアを隣接させた配置構成がそれぞれの利用を促す意味で優れていることを明らかにした¹⁾²⁾³⁾。この延長に、これら二つの利用に対応したエリア配置構成として、Active ゾーンとQuiet ゾーンによるゾーニング構成を考えている。すなわち、本研究は、地域公共図書館の開架フロアにおいて、一般書エリアをポピュラーライブラリーエリア^{注1)}とそれ以外とにわけ、前者は新聞・雑誌エリアや児童書エリアなどと隣接させてエリア間の活発な利用を促す Active ゾーンを形成し、後者はレファレンスエリアなどと Quiet ゾーンを形成するゾーニング手法を提案し、この手法の妥当性と有効性を明らかにする一連の研究である。

前二編⁴⁾⁵⁾において、既存図書館の配架の工夫から、ポピュラーライブラリーを構成する主要書籍として NDC 分類の〈59. 家政学・生活科学〉が考えられること、これをポピュラーライブラリーの核として位置付け、全国の図書館でどのようにポピュラーライブラリー

エリアが形成され、どこに配置されているかを分析し、提案するゾーニング手法の妥当性と意義を明らかにした。また、前編⁶⁾では、Active ゾーンと Quiet ゾーンを形成した図書館利用の特徴を成人の複合利用から明らかにした。本編は、もう一つの対象である子どもが親と同伴して来館するファミリー利用について、図書館利用の特徴を明らかにする。

課題と方法：ファミリー利用を対象に、Active ゾーンと Quiet ゾーンの利用の特徴、及び、ポピュラーライブラリーエリアの創出が書籍利用と複合利用にどのような影響を与えるかを明らかにすることが課題である。分析の方法は以下のとおりである。

(1) ファミリー利用については、既編²⁾³⁾ 同様、子どもと親の主目的利用の有無及び付き添いの仕方から、ファミリー利用の型を設定し、どのような利用型構成になるかを明らかにする。具体的には、付き添い利用は、子どもに主目的利用がある〈子主体-親付き添い〉型、親に主目的利用がある〈親主体-子つきまとい〉型、両者に主目的利用がある〈交互付き添い〉型の三つである。分離利用は、両者に主目的利用があり、かつ、両者が離れて主目的利用を行うもので、滞在時間のどこで分離するかから、はじめに短く分離し長く付き添う〈前半分離〉型、ほとんどを付き添い後半に短く分離する〈後半分離〉型、滞在時間のほとんどを分離する〈完全分離〉型、分離と付き添いを繰り返す〈繰り返し〉型の四つである。

(2) 複合利用については、前編⁶⁾ 同様、三つの資料（書籍、新聞・

* 有明工業高等専門学校建築学科 教授・博士(人間環境学)

Prof., Dept. of Architecture, Ariake National College of Technology, Ph. D.

雑誌、AV資料)の利用の仕方から資料の種別利用型を設定し、ポピュラーライブラリーエリアを設けた場合、どのような利用型構成になるかを明らかにする。

具体的には、それぞれの単種利用としてAV資料だけのA型(audio-visual)、書籍だけのB型(book)、新聞・雑誌だけのM型(magazine)であり、複合利用はそれらの組合せからAB型、BM型、AM型、ABM型が設定でき、これらに、配架資料の利用がない返却等手続きのみをO型として加え、8類型である。これまで成人については分析しているが、今回、子どもの種別利用型構成も明らかにする。

(3) 書籍を利用する親は、ポピュラーライブラリーエリアの書籍(以下、ポピュラーブック)と一般書エリアの書籍(以下、一般書)をどのように利用するかを明らかにする。その際、ポピュラーライブラリーの構成方式が問題となる。前編⁶⁾の成人の単独利用(以下、成人の単独利用)においては、多くの類目からそれぞれの一部を抜き出したく多類目抽出>方式と取り出す綱目数を限定してそのほとんどを取り出すく特定綱目一括>方式では、一般書とポピュラーブックの利用の仕方が異なる傾向がみられた。ファミリー利用の親においてどのような構成方式の影響があるかを明らかにする。

調査対象図書館：調査対象は、前編⁶⁾と同様、S町立図書館(以下、S館)とH市立図書館(以下、H館)である。概要を示すと、前者は、ActiveゾーンとQuietゾーンが中庭を挟んで形成されているた

め(図1)、ゾーン間の見通しはよい。Activeゾーンには児童書、雑誌、ポピュラーライブラリー、AVの各エリアがカウンターの向かい側にまとまって配置され、エリア間には壁がなく自由に行き来できる。ただ、AVエリアはホールを挟んで向かい側に視聴コーナーがある^{注2)}。奥のQuietゾーンには、一般書と郷土資料・レファレンス、及び新聞エリアと文庫本のエリアがある。後者のH館は、ActiveゾーンとQuietゾーンが入り口と事務室を挟み反対側に位置するため^{注3)}(図2)、ゾーン間は見通しにくい。建物規模が小さい上にActiveゾーンは各エリアが詰まっているため、エリア間も見通しにくく、ポピュラーライブラリーエリアの机は雑誌読書と兼用させたものとなっている^{注4)}。

これら二つの図書館は、建物や蔵書規模がかなり異なり、雑誌タイトル数、AV資料数^{注5)}、座席数に差がある他(表1)、特にポピュラーライブラリーの構成方式が異なり、S館は<59.家政学・生活科学>以外に九つの類目の一部を持ち込んだく多類目抽出>方式であり(表2)、H館は59以外に綱目00総記、29歴史、52建築学と7類芸術のほとんどを持ち込んだく特定綱目一括>方式である。

調査概要：この2館を対象に、S館は平成14年6月、11月、12月の休日5日間に、H館は平成16年7月、11月の休日4日間について、開館から閉館まで幼児や児童が親同伴で来館したファミリーを追跡調査し、平面図に入館から退館までの動線、場所と行為及び着座の

図1 S図書館ゾーン・エリア構成

図2 H図書館ゾーン・エリア構成

表1 図書館概要・調査概要

図書館		S図書館	H図書館
延床面積		2032.74 m ²	908.52 m ²
資料数	蔵書数	100,658冊	93,471冊
	(一般書)	82,392冊	61,573冊
	(児童書)	18,266冊	31,898冊
	雑誌タイトル数	300タイトル	97タイトル
	新聞種数	12紙	18紙
AV点数		3,441点	1,524点
貸出制限		制限なし・15日間	1人5冊・15日間
調査時 座席数	Activeゾーン	56(席)	42(席)
	児童書エリア	28	28
	ポピュラーライブラリーエリア	16	14
	AVエリア	5	0
	新聞・雑誌エリア	7	0
	Quietゾーン	73	29
計		129	71
調査概要	調査年	平成14年	平成16年
	月日	6/16、23、30、 11/10、12/1	7/17、18、25、 11/21
	対象家族数	61組	55組
	サンプル数	子ども88、親69人	子ども90、親62人
資料年度		平成14年3月末	平成16年3月末

表3 サンプルの家族構成

図書館	子どもの人数	親1人				親2人		合計	
		母親		父親					
		組	(%)	組	(%)	組	(%)	組	(%)
S図書館	1人	26	42.6	4	6.6	6	9.8	36	59.0
	2人	18	29.5	3	4.9	2	3.3	23	37.7
	3人以上	2	3.3	-	-	-	-	2	3.3
	合計	46	75.4	7	11.5	8	13.1	61	100.0
H図書館	1人	16	29.1	5	9.1	2	3.6	23	41.8
	2人	20	36.4	5	9.1	5	9.1	30	54.5
	3人以上	1	1.8	1	1.8	-	-	2	3.6
	合計	37	67.3	11	20.0	7	12.7	55	100.0

有無、利用時間等を記録し、1分以上継続した行為を集計した。なお、作為的にならないよう一組の調査が終わると入口の外で待機し、次に来館したファミリーを調査対象とした^{注6)}。また、退館時に子どもの学年と家族構成等をヒヤリングした。休日としたのはファミリー利用が多いためであり、調査日数が異なるのは、統計にたえるよう各館の対象家族数60組、子ども100人を目標としたためである。調査時期から数年経っているが、前編⁶⁾の成人の単独利用と比較するためには、同時期に調査したものが有効である。

得られたサンプル数は表1のとおりであり、サンプルの家族構成は親1人が両館とも約87%を占め(表3)、親の性別は母親が70～78%と圧倒的に多い^{注7)}。子どもは、1人がS館約59%に対しH館は約

図3 分離利用率

表2 ポピュラーライブラリーの構成

抽出率の単位: %							
S図書館				H図書館			
項目	網目	冊数	抽出率	項目	網目	冊数	抽出率
0 総記	62			5 技術	2,137		
	00	44	14.5		52	84	16.6
	03.04.06	18			54	75	19.5
1 哲学	29				57	25	19.8
	14	21	3.5		58	119	43.1
	15.18	8			59	1,812	90.2
2 歴史	639				50.51	22	
	29	633	37.9		53		
	20.21.28	6		6 産業	428		
3 社会科学	300				61	33	7.6
	32	29	4.1		62	208	51.1
	33	32	2.4		64	96	48.2
	36	54	2.4		67	37	9.0
	37	71	4.6		65.66	54	
	38	96	8.6		68.69		
	30.34	18		7 芸術	1,629		
4 自然科学	572				72	86	100.0
	49	546	22.5		74	458	77.0
	47.48	26			75	333	47.0
					78	295	26.4
					79	329	85.0
					73.76	28	
					77		
				8 言語	66		
					80	28	14.0
					81	38	9.0
計 5,762冊				計 5,998冊			

※1 抽出率は一般書エリアからの抽出率であり、20冊以上配架されている網目について求めた。
 ※2 1冊だけ配架されている網目は誤配とみなし除いた。

42%と少なく、H館では兄弟2人がS館より約17%多い^{注8)}。尚、以下集計したデータは家族単位ではなく、個人単位である。

2. ファミリーの利用型

既編²⁾³⁾で報告した図書館利用(以下、一般図書館利用^{注9)})における子ども全体の分離利用率は約54%であるのに比し(図3)、S館約67%、H館約73%と両館ともかなり高く、Activeゾーンを形成すると、互いの主目的利用を果たすための分離利用が行われやすいといえる。学年段階でみると、一般図書館において幼児は約36%、小低学年約64%、小高学年約87%と学年段階があがるにつれ分離利用は増える^{注10)}。これに対し、S館では幼児約45%、小低学年約79%と一般図書館より高く、小高学年はやや下がる。H館は幼児が約63%とS館よりさらに高いのが特徴的で、小低学年と小高学年はS館とそうかわらない。H館の幼児が高いのは、兄弟の利用が多いため分離利用率が高くなったものと考えられる^{注11)}。小高学年は一般の図書

図4 分離利用型構成

図5 学年段階毎の分離利用型構成

館でも分離利用率は高く、この学年段階は空間構成に左右されずに分離利用ができるためであろう。いずれにしても、Activeゾーンを有する図書館では、幼児や小低学年で子どもと親が互いの主目的利用のために分離する利用が多くなるといえる。

ファミリーの利用型をみると、付き添い利用は＜子主体-親付き添い＞型と＜交互付き添い＞型がほとんどで、＜親主体-子つきまとい＞型はS館の1例のみである。一般図書館における分離利用は、＜前半分離＞型と＜完全分離＞型が多く（図4）、＜後半分離＞型と＜繰り返し＞型は少ない。これに対し、S館は＜前半分離＞型、＜後半分離＞型、＜完全分離＞型いずれも少なくなり、＜繰り返し＞型が約32%と一般図書館の3倍にもなる。H館も同様であり、この＜繰り返し＞型は一般図書館の約4倍にもなる。つまり、一般図書館では＜前半分離＞型や＜完全分離＞型になっていた利用が、分離と付き添いがしやすいためにそれらを繰り返した結果、＜繰り返し＞型が多くなったものと考えられ、Activeゾーンを有する図書館の特徴である^{注12)}。学年段階でみると（図5）、一般図書館における幼児は＜前半分離＞型が多く、高学年になるにつれ＜完全分離＞型が多くなるという学年段階による分離利用の変化がみられた。これに対し、両館とも小低学年と小高学年の違いは小さく、いずれも＜後半分離＞型を除く三つが同程度である。幼児においても＜繰り返し＞型が多いのは同じであるが、両館に共通して＜完全分離＞型がかなり少なく、その分S館は＜前半分離＞型が、H館は＜繰り返し＞型が多い。H館はActiveゾーンの規模が小さく、親の居場所がより身近で行き来しやすいために＜繰り返し＞型が多くなったと考えられる。いずれにしても、Activeゾーンはそれぞれの主目的利用を達成できるエリアが近くにあるために、どの学年段階も必要に応じて分離と付き添いを繰り返すことができ、逆に、それがお互いの主目的利用を促していることになる。

3. 主目的利用の内容

そこで、主目的利用の種別利用型構成をみると（表4）、種類毎の資料が充実しているS館は、成人の単独利用やファミリー利用の親以上に子どもは複合利用が多く、しかも、ほとんどがAB型、AV資料と書籍（主に児童書）^{注13)}の複合利用である。単種利用はほとんどがB型、書籍だけの利用であり、AV資料だけの利用は少ない。これに対し、AV資料の種類と数に難があるH館は、利用のほとんどはB型、書籍だけの利用である。したがって、子どもは書籍の単種利

表4 種別利用型

利用型		子ども				親				成人単独利用			
		S図書館		H図書館		S図書館		H図書館		S図書館		H図書館	
		人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
資料利用なし 単種利用	O型	2	2.3	0	-	10	14.5	11	17.7	11	9.6	10	9.0
	A型	4	4.5	0	-	5	7.2	0	-	7	6.1	1	0.9
	B型	27	30.7	88	97.8	16	23.2	16	25.8	30	26.3	34	30.6
	M型	0	-	0	-	9	13.0	9	14.5	16	14.0	15	13.5
	小計	31	35.2	88	97.8	30	43.5	25	40.3	53	46.5	50	45.0
複合利用	AB型	36	40.9	0	-	3	4.3	0	-	6	5.3	1	0.9
	BM型	4	4.5	2	2.2	20	29.0	25	40.3	34	29.8	50	45.0
	AM型	0	-	0	-	2	2.9	0	-	1	0.9	0	-
	ABM型	15	17.0	0	-	4	5.8	1	1.6	9	7.9	0	-
	小計	55	62.5	2	2.2	29	42.0	26	42.0	50	43.9	51	45.9
合計		88	100.0	90	100.0	69	100.0	62	100.0	114	100.0	111	100.0

用か、AV資料が充実していれば書籍との複合利用になると考えてよい。ちなみに、S館についてAB系複合利用比（AB型数+ABM型数の合計/B型数+BM型数の合計）は1.65であり、成人の単独利用が0.29、ファミリー利用の親でも0.23であるのに比して極めて大きい。一方、親の種別利用型をみると、親の主目的利用がない＜子主体-親付き添い＞型（O型）^{注14)}があるため、それ以外の型は両館とも成人の単独利用より構成割合は低くなる。しかし、単種利用でB型が多い点や複合利用はBM型が中心となる点において成人の単独利用と同様である。そこで、BM系複合利用比（BM型数+ABM型数の合計/B型数+AB型数の合計）をみると、成人の単独利用では、一般書エリアと新聞・雑誌エリアの隣接型の1.14より、S館は1.19、H館は1.43と大きかったが^{注15)}、ファミリー利用の親はS館が1.26、H館は1.63とさらに大きくなっており、Activeゾーンを有する図書館は、書籍を利用する親において、成人の単独利用以上に新聞・雑誌との複合利用を促進しているといえる。

4. 親の利用書籍

次に、書籍利用に注目すると、前編⁶⁾の成人の単独利用は一般書の利用が約71～88%とメインであるが、一方でポピュラーブックの利用は40%にもなる（表5）。これに対し、ファミリー利用の親は、両館ともポピュラーブックの利用が成人の単独利用より25%前後も増え（表6）、実に約63～69%となり、成人の単独利用以上にポピュラーライブラリーエリアを設ける意義は大きい。しかし一方で、一般書利用も約60～62%ある。つまり、ポピュラーライブラリーを設けてもその利用だけに特化してしまうわけではない。しかも、成人の単独利用で多かったS館の一般書利用は約28%も減っているため、両館の差は小さい。したがって、ポピュラーブックと一般書の利用の仕方が問題となる。成人の単独利用では、この利用の仕方はポ

ピューラーライブラリー構成方式により異なり、＜多類目抽出＞方式では一般書とポピュラーブックをともに利用する併用利用が多く、＜特定綱目一括＞方式では一般書のみかポピュラーブックのみの利用が多くなる傾向がみられた^{注16)}。そこで、利用した書籍の組合せをみると、当然、成人の単独利用に比べ一般書のみ利用（表中、Bのみ）が減り、ポピュラーブックのみの利用（表中、Pのみ）が増えるが、H館では成人の単独利用では少なかった併用利用（表中、B+P）が増え、結果的に、両館に共通して、一般書のみを利用する、ポピュラーブックのみを利用する、あるいはその両方を利用する、という三つの利用の仕方がそう変わらずに併存する形である。つまり、ポピュラーライブラリーの構成方式の差異は小さく、ここに成人の単独利用との違いが窺われる。三つの利用の仕方を抽出すると、一般書（B）のみの利用：一般書のみ利用は約31～37%あり、ポピュラーライブラリーがあろうと影響されない、つまり、もともと綱目59やそれ以外の多類目・特定綱目を蒐集した「暮らしと生活」といった構成が対象でない利用である。ポピュラーブック（P）のみの利用：ポピュラーライブラリーで満足し得る、つまり、ポピュラーライブラリーの設定が直接的に寄与した利用であり、40%近くにのぼる。しかも、＜多類目抽出＞方式のS館でも単独利用時に比べて約28%も増えH館とかわらないことから、両方の構成方式に共通した綱目59の書籍が主対象と考えられ、今回の事例では母親が圧倒的に多いためであろう^{注17)}。一般書とポピュラーブックの併用（B+P）利用：成人の単独利用において＜多類目抽出＞方式のS館では一般書への橋渡しとみられた利用であるが、＜特定綱目一括＞方式のH館で3割を越えていることから、ポピュラーブックは対象でありつつも同時にそれ以外の対象がある利用と考えてよい。

ファミリー利用型毎にみると、付き添い利用、これは主に＜交互付き添い＞型であるが、S館はBのみ、H館はBのみかPのみであり、この型では親は一般書の利用が多く、児童書エリア利用の後、離れたQuietゾーンを利用するために子どもはつきまとわざるを得ない状況にあったと考えられる。分離利用においてはポピュラーブックの比重が高まるが、先ほどみた両館の全体傾向と大差なく数が多いことから、先ほどの傾向は分離利用により生じていると考えてよい。利用型でいえば、＜前半分離＞型や＜後半分離＞型は分離している時間が短いためBかPのみが多いが、＜完全分離＞型や＜繰り返し＞型は分離時間も相対的に長くなるためかBのみは少なく、前二者に比べB+Pが多い傾向にある。つまり、利用対象が利用型を決める一要因になっている。

いずれにしても、ファミリー利用の親においてポピュラーライブラリーエリアの存在意義は大きい。一方で、ポピュラーブックのみの利用に限定されない、言い換えると、Activeゾーンにポピュラーライブラリーエリアを設けても、そのゾーン内で親の書籍利用は完結するわけではない。

5. 滞在時間

子どもと親が同伴して来退館したファミリーを対象としたため、子どもと親の滞在時間はほとんどかわらず、S館の子どもは約31分、H館の子どもは約30分と図書館の差も小さい（表7、表8）。成人の単独利用時と親の滞在時間を比較すると、H館では成人単独利用はかなり長い滞在であったにも関わらず親の滞在時間は短くなり、両

表5 成人単独の利用書籍（参考文献6）より再掲）

利用型	S 図書館				H 図書館			
	Bのみ	B+P	Pのみ	計	Bのみ	B+P	Pのみ	計
	47 (61.9)	20 (26.3)	9 (11.8)	76 (100.0)	44 (57.1)	11 (14.3)	22 (28.6)	77 (100.0)
成人の 単独利用合計	B利用者67人、88.2% P利用者29人、38.2%				B利用者55人、71.4% P利用者33人、42.9%			

B:一般書 P:ポピュラーブック B+P:両方

表6 親の利用書籍

利用型	S 図書館				H 図書館			
	Bのみ	B+P	Pのみ	計	Bのみ	B+P	Pのみ	計
	6 (37.5)	2 (12.5)	8 (50.0)	16 (100.0)	7 (43.8)	5 (31.2)	4 (25.0)	16 (100.0)
B型	1 (33.3)	1 (33.3)	1 (33.3)	3 (100.0)	-	-	-	-
AB型	6 (30.0)	7 (35.0)	7 (35.0)	20 (100.0)	5 (20.0)	8 (32.0)	12 (48.0)	25 (100.0)
BM型	3 (75.0)	-	1 (25.0)	4 (100.0)	1 (100.0)	-	-	1 (100.0)
ABM型	16 (37.2)	10 (23.3)	17 (39.5)	43 (100.0)	13 (31.0)	13 (31.0)	16 (38.0)	42 (100.0)
計	B利用者26人、60.3% P利用者27人、62.8%				B利用者26人、61.9% P利用者29人、69.0%			

B:一般書 P:ポピュラーブック B+P:両方

付き添い利用 合計	5 (62.5)	2 (25.0)	1 (12.5)	8 (100.0)	2 (50.0)	-	2 (50.0)	4 (100.0)
分離利用合計	11 (31.4)	8 (22.9)	16 (45.7)	35 (100.0)	11 (28.9)	13 (34.2)	14 (36.8)	38 (100.0)
前半分離+	6 (46.2)	2 (15.4)	5 (38.5)	13 (100.0)	4 (36.4)	2 (18.2)	5 (45.5)	11 (100.0)
後半分離+	5 (22.7)	6 (27.3)	11 (50.0)	22 (100.0)	7 (26.0)	11 (40.7)	9 (33.3)	27 (100.0)
完全分離+								
繰り返し								

B:一般書 P:ポピュラーブック B+P:両方

図6 利用型毎の滞在時間

館ともS館の成人単独利用の滞在時間とそう変わらない。以下、子どもの滞在時間で分析を進める。

分離利用と付き添い利用でみると、分離利用は約32～36分と両館とも共通的で全体の滞在時間とそう変わらないが、付き添い利用は約21～23分と両館とも共通的に約10分ほど短い（表7、表8）。そこで、ファミリーの利用型でみると（図6）、付き添い利用は、1例しかない＜親主体-子つきまとい＞型を除くと両館の違いは小さく、＜子主体-親付き添い＞型は一般図書館のそれとかわらないが、それぞれの主目的利用を満たすために時間が長いのが特徴的であった＜交互付き添い＞型は、両館とも一般図書館のそれよりかなり短い。したがって、この型は、子どもか親のいずれかあるいは両方の主目的利用の時間が短いことになるが、その分析は次章にゆずる。分離利用は、＜前半分離＞型と＜後半分離＞型で両館の差が大きい。＜前半分離＞型は同伴した兄弟の学年段階が異なることが影響していると考えられ^{注18)}、＜後半分離＞型は事例数が少ないうえに^{注19)}、S館は3/4の事例が利用時間が短いAV資料の選択であり、滞在時間が短くなったものである。いずれにしても、Activeゾーンを形成した図書館として両館を平均すると、二つの利用型とも一般図書館のそれとそう変わらないことになる。＜完全分離＞型と＜繰り返し＞型は

表7 S図書館のエリア別利用人数・時間

利用型		Activeゾーン										Quietゾーン						ホール		その他		平均滞在時間	
		AV		児童書		ポピュラー		雑誌		小計		一般書		新聞・文庫		小計							
		人数	時間	人数	時間	人数	時間	人数	時間	人数	時間	人数	時間	人数	時間	人数	時間	人数	時間	人数	時間		
ファミリー利用	子ども	付き添い利用	17 (58.6)	4.0	27 (93.1)	11.5	6 (20.7)	7.5	11 (37.9)	2.0	29 (100.0)	15.4	10 (34.5)	6.9	1 (3.4)	1.0	10 (34.5)	7.0	24 (82.8)	3.8	2 (6.9)	1.0	29 (100.0)
		分離利用	42 (71.2)	6.5	53 (89.8)	17.8	19 (32.2)	10.2	32 (54.2)	5.9	57 (96.6)	28.1	19 (32.2)	10.8	6 (10.2)	5.8	22 (37.3)	10.9	57 (96.6)	4.4	8 (13.6)	3.6	59 (100.0)
		全体	59 (67.0)	5.7	80 (90.9)	15.7	25 (28.4)	9.6	43 (48.9)	4.9	86 (97.7)	23.8	29 (33.0)	9.4	7 (8.0)	5.1	32 (36.4)	9.7	81 (92.0)	4.2	10 (11.4)	3.1	88 (100.0)
	親	付き添い利用	11 (50.0)	4.0	20 (90.9)	10.1	5 (22.7)	9.2	7 (31.8)	1.7	22 (100.0)	13.8	9 (40.9)	4.5	2 (9.1)	1.0	9 (40.9)	4.7	17 (77.3)	3.7	1 (4.5)	1.0	22 (100.0)
		分離利用	23 (48.9)	5.3	30 (63.8)	13.0	27 (57.4)	14.1	31 (66.0)	11.0	46 (97.9)	26.8	24 (51.1)	10.9	10 (21.3)	8.6	26 (55.3)	13.3	47 (100.0)	3.1	8 (17.0)	4.6	47 (100.0)
		全体	34 (49.3)	4.9	50 (72.5)	11.8	32 (46.4)	13.3	38 (55.1)	9.3	68 (98.6)	22.6	33 (47.8)	9.1	12 (17.4)	7.3	35 (50.7)	11.1	64 (92.8)	3.3	9 (13.0)	4.2	69 (100.0)
	成人の単独利用全体		23 (22.3)	9.2	10 (9.7)	3.9	33 (32.0)	15.3	51 (49.5)	11.4	74 (71.8)	18.2	68 (66.0)	21.5	29 (28.2)	14.4	80 (77.7)	23.5	70 (68.0)	2.7	5 (4.9)	2.0	103 (100.0)

左：上　利用人数（人）　下　割合（％）　右：利用時間（分）

左：上 利用人数（人） 下 割合（％） 右：利用時間（分）

表8 H図書館のエリア別利用人数・時間

利用型			Activeゾーン										Quietゾーン						ホール		その他		平均滞在時間	
			A V		児童書		ポピュラー		新聞・雑誌		小計		一般書		文庫		小計							
ファミリー利用	子ども	付き添い利用	1 (4.2)	1.0	24 (100.0)	17.1	3 (12.5)	1.0	3 (12.5)	1.0	24 (100.0)	17.4	4 (16.7)	7.8	-	6 (25.0)	5.2	21 (87.5)	4.8	2 (8.3)	3.8	24 (100.0)	23.2	
		分離利用	1 (1.5)	1.0	66 (100.0)	23.8	24 (36.4)	4.2	11 (16.7)	2.0	66 (100.0)	25.7	18 (27.3)	4.4	1 (1.5)	4.0	18 (27.3)	4.6	63 (95.5)	4.7	9 (13.6)	3.2	66 (100.0)	31.9
		全体	2 (2.2)	1.0	90 (100.0)	22.0	27 (30.0)	3.9	14 (15.6)	1.8	90 (100.0)	23.5	22 (24.4)	5.0	1 (1.1)	4.0	24 (26.7)	4.8	84 (93.3)	4.8	11 (12.2)	3.3	90 (100.0)	29.6
	親	付き添い利用	-	-	18 (100.0)	16.8	3 (16.7)	1.5	4 (22.2)	1.0	18 (100.0)	17.3	4 (22.2)	3.4	1 (5.6)	1.0	4 (22.2)	3.6	16 (88.9)	4.0	6 (33.3)	5.0	18 (100.0)	23.3
		分離利用	1 (2.3)	1.0	35 (79.5)	15.1	33 (75.0)	11.3	29 (65.9)	3.8	43 (97.7)	23.5	21 (47.7)	11.6	4 (9.1)	3.3	21 (47.7)	12.2	39 (88.6)	3.9	11 (25.0)	6.5	44 (100.0)	33.9
		全体	1 (1.6)	1.0	53 (85.5)	15.7	36 (58.1)	10.5	33 (53.2)	3.4	61 (98.4)	21.7	25 (40.3)	10.3	5 (8.1)	2.8	25 (40.3)	10.8	55 (88.7)	3.9	17 (27.4)	5.9	62 (100.0)	30.8
	成人の単独利用全体			2 (2.0)	2.0	18 (17.8)	28.0	50 (49.5)	30.4	62 (61.4)	3.1	75 (74.3)	29.6	62 (61.4)	33.6	10 (9.9)	6.0	63 (62.4)	34.0	56 (55.4)	1.7	22 (21.8)	5.0	101 (100.0)

左：上 利用人数（人） 下 割合（％） 右：利用時間（分）

両館の差は小さく、共通して、一般図書館と比べ＜完全分離＞型はやや長くなり、逆に＜繰り返し＞型はかなり短くなっている。2章において＜繰り返し＞型が多くなったこととあわせて考えると、一般図書館では＜前半分離＞型や＜完全分離＞型になっていた利用のうち、比較的滞在時間が短い利用が＜繰り返し＞型に移行したため、S・H館の＜繰り返し＞型は滞在時間が短くなったと解釈できる。

6. ゾーン別、エリア別の利用状況

S館についてみると（表7）、子ども全体では、ほとんどがActiveゾーンを利用し、平均滞在時間31分に対して約24分を費やしている。ゾーン内では、児童書エリアとAVエリアは約91、67％の者が約16、6分利用し、この二つが利用の中心であるが、そればかりでなく、ポピュラーライブラリーエリアや雑誌エリアをそれぞれ約28、49％が約10、5分利用している。一方、約10分と短いものの約36％がQuietゾーン、主に一般書エリアを利用している。付き添い利用は、＜子主体・親付き添い＞型と＜交互付き添い＞型が半々で、滞在時間は約21分と短いActiveゾーン内を約15分利用し、主に児童書エリアとAVエリアであるが、人数は子ども全体と同程度で、時間は短い。＜交互付き添い＞型はポピュラーライブラリーや雑誌エリアに約21、38％が約8、2分、Quietゾーンでは一般書エリアに約35％が約7分親に付きまといっている。これに対し、分離利用は、ほとんどの者がActiveゾーンを利用し時間は約28分と付き添い利用より約13分も長い。児童書エリアの利用人数はそう変わらずに時間が約6分長いのであるが、一方で、AVエリア以外にもポピュラーライブラリーエリアや雑誌エリアのいずれも付き添い利用より利用人数は多く、時間も長くなっており、必ずしも付き添いの立ち寄りとは

言い難い。そればかりかQuietゾーンの一般書エリアの利用は、人数は約32％で主に小高学年であるが、時間が約11分と付き添い利用より長くなっており、Activeゾーン内の各エリアはもちろんのこと、一般書エリアまで分散して活発に利用している。

親全体では、ほとんどの親がActiveゾーンを利用するが、半数はQuietゾーンを利用している。成人の単独利用と比較すると、Activeゾーンの利用人数はより多く、中でも児童書エリアの利用人数が約73％に及ぶのは当然としても、時間こそやや短くなるものの、ポピュラーライブラリーエリアや雑誌エリアの利用人数はむしろ多い。その分、Quietゾーンにおいては一般書エリアの利用時間は約9分とかなり短い。付き添い利用は、先述の子どもの付き添い利用と同じ傾向であるが、一般書エリアの利用時間はさらに短い。特に＜交互付き添い＞型は前章でみた如く一般の図書館より滞在時間が短かったが、親の一般書利用の時間を短くして対処している。分離利用は、子どもと違い、児童書エリアやAVエリアの利用人数はそれぞれ約64、49％と少なくなり、その分ポピュラーライブラリーエリアや雑誌エリアの利用人数はそれぞれ約57、66％と成人の単独利用よりかなり多く、しかも利用時間はそうかわらない。一方、Quietゾーンの一般書エリアは利用人数は半数にのぼるが、利用時間はActiveゾーン内の各エリアの利用時間程度で、成人の単独利用に比べると半分程度と短い。つまり、Activeゾーン内の各エリアを利用して時間を費やしつつ、半数はそれでも短い時間で一般書エリアを利用している。このことは、先述の＜交互付き添い＞型でも同様であり、S館の親は、Quietゾーン、中でも一般書エリアの利用時間が短いことが特徴的である。

H館をみると（表8）、子どもは全員がActiveゾーンの児童書エリ

アを利用し、全体ではゾーンの利用時間約 24 分に対して約 22 分を費やしている。そのため、座席がない新聞・雑誌エリアは立ち寄り程度であるばかりでなく、ポピュラーライブラリーエリアも 30% 程度は利用するが時間は約 4 分とかなり短い。Quiet ゾーンにおいて一般書エリアの利用人数は S 館より約 10% 少なくなるが、特に利用時間は半分とかなり短い。全体として、利用エリアは Active ゾーンの児童書エリアに集中している。付き添い利用において一般書エリアの利用人数が少ないのは、＜子主体-親付き添い＞型が約 3:1 と多く＜交互付き添い＞型が少ないためであり、利用時間は S 館と同程度である。分離利用は、ポピュラーライブラリーエリアの利用人数が約 37% と S 館より多くなるが、時間は約 4 分と S 館の半分に満たず、これは親のところに行っても、また、すぐに児童書エリアに戻る者が多いためである。一般書エリアの利用は、利用人数は S 館と同程度であるが、利用時間は S 館の半分以下である。ここに、ゾーン配置の影響が考えられる。つまり、子どもと親が両ゾーンに別れる分離利用の場合、S 館は Active ゾーンと Quiet ゾーンが中庭を挟むものの視覚的には連続しているため、子どもは Active ゾーンの親と離れても安心できるが、H 館は両ゾーンが事務室等で分断され視覚的連続性がないため、Active ゾーンの親と時間をかけて離れづらいということになる。

親全体は、成人の単独利用よりも滞在時間が約 15 分も短い、特に、Quiet ゾーンの一般書エリアの利用時間が約 23 分も短いためであり、利用人数も約 20% 少なく、利用時間ともに S 館とそうかわらない。Active ゾーン内では児童書エリアの利用人数は S 館より多く、ポピュラーライブラリーエリアの利用人数も S 館同様成人の単独利用時より約 10% 増えるものの、時間は約 10 分と 20 分近くも短くなり、S 館との差は小さい。付き添い利用は、子どもの付き添い利用の傾向と同じであり、一般書エリアの滞在時間が短いのも S 館と同様である。分離利用は、S 館より児童書エリアとポピュラーライブラリーエリアの利用人数は約 16、18% も多く、座席が配置されたこの二つのエリアに集中していることがわかる。一般書エリアは S 館と同程度の利用人数であり、時間もそう変わらず、＜交互付き添い＞型を含めやはり限られた短い時間で一般書エリアを利用している。

全体として、両館とも、子どもも親も Active ゾーン中心の利用であること、しかし一方で、親の半数と子どもの 3 割前後は限られた短い時間の中で Quiet ゾーンの一般書エリアを利用していることが特徴的である。Active ゾーンの中では、分離利用において図書館により過ごすエリアが異なっている。S 館では子どもは児童書エリアを中心としつつ、他の AV エリア、雑誌エリア、ポピュラーライブラリーエリアに分散して滞在しており、親も AV エリアを除いて同様である。それに対し、H 館では、子どもはほとんど児童書エリアにおり、親もやはり児童書エリアを中心としつつ、ポピュラーライブラリーエリアに滞在するという構図である。このことは、Active ゾーンの規模と各資料の充実度の違いの影響もあろうが、各エリアの座席配置の影響が大きいと考えられる。というのも、H 館は新聞・雑誌エリアに座席がなく、かつ、児童書エリアと他のエリアとの座席比が S 館は約 1:1 に対し、H 館は約 2:1 と児童書エリアに集中しているからである。また、Active ゾーンと Quiet ゾーンの配置構成は、子どもの分離利用、特に親と離れた Quiet ゾーンの一般書エリア利用の時間に影響している。

7. 拠点利用

前章の分離利用において、子どもはポピュラーライブラリーエリアや雑誌エリアにおいてどう過ごしているかであるが、ここでは付き添い読書利用に注目する。既編³⁾で、児童書エリアと一般書エリアの隣接型では＜前半分離＞型において親の付き添い読書利用-分離した後、親が一般書エリアで目的の本を探し、児童書エリアに戻り子どもの傍らで本を読みながら見まもる利用-がみられ、この利用は隣接型図書館だけにみられる特徴であることを指摘した。今回、逆に子どもの付き添い読書利用-子どもが親の近くの座席について児童書を読む-という利用もみられ、これらをまとめ拠点利用と呼ぶことにする。すなわち、拠点利用は、子どもか親のどちらかがいるエリアで合流した後も、近くの座席に座りそれぞれの主目的利用を継続することである。この拠点利用は、両図書館とも＜前半分離＞型と＜繰り返し＞型でみられ、S 館 14/39 例、H 館 12/44 例と事例数もほぼ同じである。内訳は、どちらかが本を選んでいる横で付き添い読書をするケースが 5 例あるが、多くは親子ともに付き添い読書をしており、拠点の位置は、前章でみた如く Active ゾーン内の座席配置で決まり、児童書エリアが最も多く（S 館 8 例、H 館 7 例）、ついでポピュラーライブラリーエリア（S 館 4 例、H 館 5 例）、雑誌エリア（S 館 4 例）である。いずれにしろ、Active ゾーンは、親子が離れては資料を探し、合流しては付き添いつつ各自の資料を読むという行為を繰り返しやすい空間と言える。

8. まとめ

地域公共図書館の開架フロアについて、ポピュラーライブラリーを核にした Active ゾーンと Quiet ゾーンで構成された図書館利用の特徴をファミリー利用から明らかにし、この手法が親と子どもの分離利用や親の書籍と新聞・雑誌との複合利用を促進する平面構成であることを明らかにした。以下、要約する。

- 1) Active ゾーンと Quiet ゾーンで構成された図書館におけるファミリー利用は、子どもと親が互いの主目的利用を行うために分離する利用が多く、特に、幼児・小低学年で顕著であり、親の付き添い利用が多い幼児でも分離利用しやすい。この分離利用では＜繰り返し＞型、子どもと親が離れては付き添いの繰り返しが多いことが特徴的であり、これは、程度の差こそあれどの学年段階でも多くみられる。
- 2) 子どもが利用する資料は AV 資料と書籍がほとんどであり、AV 資料が充実すれば書籍との複合利用が多くなる。また、書籍を利用する親も成人の単独利用以上に新聞・雑誌との複合利用が促進される。
- 3) 親が利用する書籍はポピュラーブックの利用が 7 割近くにのぼり、成人の単独利用以上にポピュラーライブラリーエリアを設ける意義は大きい。その利用は、母親の同伴が多い場合には網目 59 が主対象となるため、ポピュラーライブラリーの構成方式の影響は少ないが、一方で、網目 59 だけに主対象がない場合もあるため、一般書の利用も 6 割程度あり、多くは限られた短い時間で一般書エリアを利用する。
- 4) 滞在エリアは Active ゾーン内が中心であり、ほとんどの子どもと親は主に児童書エリアを利用し利用時間も長い。子どもは他に AV エリアの利用も多いが、親は分離利用により、ポピュラーライブラ

リーエリアや新聞・雑誌エリアにも多くが滞在する。一方、Activeゾーン内の各エリアの座席配置が充実すれば、子どもは各エリアに分散して滞在する。それは、分離利用で多い<繰り返し>型において、書籍の選択と付き添い読書を繰り返す拠点利用がみられるからであり、Activeゾーンを形成した図書館の大きな特徴である。

9.Activeゾーンを形成した図書館利用の特徴

前編⁶⁾の成人単独利用とあわせてActiveゾーンを形成した図書館利用の特徴をまとめると、

- 1) 成人は単独利用であれファミリー利用であれ、書籍利用者において新聞・雑誌との複合利用が促進される。その書籍利用において、ポピュラーブックの利用は成人の単独利用で約4割、ファミリー利用の親で実に6～7割にも及び、ポピュラーライブラリーエリアを設ける意義は大きい。このポピュラーライブラリーの構成方式は、単独で利用する成人の一般書エリア利用に影響するが、ファミリー利用の親は特に母親のように綱目59が主対象になる場合は、構成方式の影響は少ない。
- 2) 上述の如くポピュラーライブラリーの構成方式によっても異なるが、成人の単独利用ではActiveゾーンとQuietゾーン（とりわけ一般書エリア）の利用はおおまかにはどちらも半数程度以上になる。一方、ファミリー利用はほとんどの子どもと親がActiveゾーンを利用し、中でも児童書エリアが利用の中心となり、Quietゾーンの利用は人数も時間も半減する。このActiveゾーン内では、子どもと親は互いの主目的利用を行うために分離する利用、中でも<繰り返し>型が多くなり、Activeゾーンの各エリアの座席が充実していれば、子どもは付き添い読書等の拠点利用により、親とともに利用エリアはポピュラーライブラリーエリアや雑誌エリアなどゾーン内に広がる。
- 3) 一方で、成人の単独利用時は複合利用や書籍の併用利用で両ゾーンを行き来すること、また、ファミリー利用の親と小高学年はActiveゾーンで過ごしながらも短い時間でQuietゾーンを利用する者もいること、しかも、両ゾーンの視覚的連続性によって子どもの一般書エリア利用時間は影響を受けやすいことから、ActiveゾーンとQuietゾーン、中でもポピュラーライブラリーエリアと一般書エリアは遠くに切り離すのではなく、できるだけ近くに配置する方が望ましい。

尚、本研究は平成13～15年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C（2））による。

注

- 注1) 参考文献4)で定義しているが、再掲すると、利用者が多く、かつ、ファミリー利用で同伴する親が利用しやすい書籍や、新聞・雑誌と複合利用されやすい書籍を集め、これをポピュラーライブラリーと呼び、これらが配架されたスペースをポピュラーライブラリーエリアとする。
- 注2) AVエリアは二つに分かれ、視聴コーナーにCD等が配架され、雑誌エリア横にはビデオテープが配架されている。
- 注3) 建物は2階建てであり、2階は学習室、お話し室、準備室等である。当初は、一般書エリアと児童書エリアを階で分ける案も検討されたが、利用を考慮し二つのエリアを1階に持ってくる案に落ち着いたものである。
- 注4) H館のポピュラーライブラリーエリアには雑誌架に面して机があり雑誌利用が考えられるが、ポピュラーライブラリーに囲まれているため、エリアとしてはポピュラーライブラリーエリアに入れている。
- 注5) AV資料はS館はCD（1157点）と映画等のビデオ（1979点）が中心であり、視聴ブースも5席ある。それに対して、H館はカウンター横にカセッ

トテープ（296点）とCD（117点）が配架され、ビデオ（1057点）は郷土資料的なジャンルのものが2階の学習エリアの一部に配架されている。

注6) 調査中に別のファミリーの一員であることが判明した場合等は調査を中止した。なお、調査後、子どもが中学生のケースが3例あり、サンプルから除いた。

注7) 父母以外は叔父1人、祖母3人である。

注8) 参考文献2)の図書館利用では子どもは1人が約64%であり、S館は1人約59%とそうかわらない。

注9) ここではActiveゾーンが形成されている図書館利用と区別する意味で、Activeゾーンが形成されていない参考文献2)3)の図書館利用を一般の図書館利用とした。その調査対象図書館概要を以下に再掲する。

図書館名	OM市立図書館	YA市立図書館	MY図書館	YO市立図書館
空間の型	切り離し型	切り離し型	隣接型	隣接型
延べ床面積	2,203㎡	2,873㎡	1,587㎡	2,290㎡
開架フロア面積	1,633㎡	1,474㎡	1,131㎡	981㎡
蔵書数	179,798冊	134,551冊	125,953冊	213,467冊
開架冊数（一般書）	約9.7万冊	約10.1万冊	約7.2万冊	約8.2万冊
（児童書）	約2.8万冊	約3万冊	約2.6万冊	約2.5万冊
新聞種数	12種	14種	6種	24種
雑誌タイトル数	141タイトル	215タイトル	151タイトル	564タイトル
AV点数	3078点	5728点	1742点	なし
本の貸出冊数制限	制限なし	制限なし	10冊	制限なし
市民一人当たり貸出冊数	4.1冊/人	7.2冊/人	8.0冊/人	9.2冊/人

なお、このうち参考文献2)は4図書館全部、参考文献3)はOM、YA、YOの3図書館を対象としたものである。

注10) 参考文献2)参照。

注11) 参考文献2)参照。

注12) この<繰り返し>型は、分離回数が1～7回までと様々であるが、平均すると2.2～2.5回分離している。また、平均の分離時間は約10～14分で付き添い時間約24～26分の約半分であり、S館とH館で差は小さい。

注13) 子どもの対象書籍は主に児童書であるが、6章に記したように小高学年になると一般書の併用利用が増える。そのため、ここでは書籍と記した。

注14) 親に主目的利用がないため、資料利用がないO型に含めた。

注15) 参考文献6)参照。尚、参考文献6)ではS館1.23と記したが1.19の誤りである。

注16) 参考文献6)参照。

注17) 参考文献3)では、親の性別は母親が平日は約87%、休日は約60%であったが、今回は休日に関わらず、母親は約70～78%と多い。

注18) <前半分離>型の子どもで小高学年の兄弟が同伴したケースはS館は7/14例に対して、H館は2/19例と少なく、小高学年の兄弟が同伴したケースは滞在時間が長くなり、特に幼児で顕著である（参考文献2)参照）。

注19) <後半分離>型はH館は2例、S館は4例であり、H館の1例のみが滞在時間69分と長くなっており、もう1例は15分とS館の4例の平均とそうかわらない。

参考文献

- 1) 北岡敏郎ほか：成人の複合利用からみた公共図書館のコーナー構成とブラウジングについて、日本建築学会計画系論文集、第486号、pp61～68、1996.8
- 2) 北岡敏郎ほか：図書館利用型の構成とその特徴 ファミリー利用からみた公共図書館のコーナー構成に関する研究（1）、日本建築学会計画系論文集、第498号、pp117～122、1997.8
- 3) 北岡敏郎ほか：<分離>利用型の特徴と児童書コーナーと一般書コーナーの配置構成 ファミリー利用からみた公共図書館のコーナー構成に関する研究（2）、日本建築学会計画系論文集、第518号、pp129～135、1999.4
- 4) 北岡敏郎：ポピュラーライブラリーエリア創出の可能性 地域公共図書館における開架フロアのゾーニング手法に関する研究（1）、日本建築学会計画系論文集、第73巻、第626号、pp751～756、2008.4
- 5) 北岡敏郎：ポピュラーライブラリーエリアの形成と資料構成案 地域公共図書館における開架フロアのゾーニング手法に関する研究（2）、日本建築学会計画系論文集、第74巻、第638号、pp751～760、2009.4
- 6) 北岡敏郎：Activeゾーンを形成した図書館における成人利用の特徴 地域公共図書館における開架フロアのゾーニング手法に関する研究（3）、日本建築学会計画系論文集、第75巻、第652号、pp1365～1371、2010.6

（2011年1月7日原稿受理、2011年6月8日採用決定）